

## ハイデガー・フォーラム創設の呼びかけ

**創設呼びかけ人**（五十音順。） 上利博規、秋富克哉、池辺寧、伊藤徹、稲田知己、井上克人、魚住孝至、大橋良介、小川侃、小野紀明、鹿島徹、加藤恵介、門脇俊介、菊地恵善、日下部吉信、古東哲明、氣多雅子、後藤嘉也、小林信之、小柳美代子、斎藤慶典、酒井潔、榊原哲也、相楽勉、佐々木一也、佐野之人、四日谷敬子、茂牧人、杉田正樹、関口浩、高田珠樹、高梨友宏、高橋広次、高山守、田中敦、谷徹、丹木博一、戸島貴代志、仲原孝、細川亮一、牧野英二、的場哲朗、三富明、嶺秀樹、宮原勇、虫明茂、村井則夫、村岡晋一、森一郎、森秀樹。（以上、五〇名。）

**創設趣旨説明** 本フォーラムは、1. ハイデガーの思索に関心をもつ日本全国の研究者間の対話交流の場を提供し、2. 現代における哲学の意義を根本から問い直すことをめざして創設される。とりわけ、2に重きが置かれていることを、強調しておきたい。

従来、日本におけるハイデガー研究は、田辺、九鬼、和辻、三木以来、世界でも有数の水準を保ち、日本近代思想の有力な発信源となってきた。戦後も、高水準の研究が少なからず世に問われ、大学における哲学研究の一翼を担ってきた。だが近年、全集の公刊と相俟って、欧米とりわけ合衆国でハイデガー哲学の読み直しが進むなか、日本におけるハイデガー研究はむしろ停滞気味であり、往年の輝きを徐々に失いつつある。

われわれはこうした現状の数ある原因の一つとして、まず、ハイデガー研究者間の対話の不在を挙げたい。今日なおハイデガー研究に携わる者は全国に数多いが、一つの開かれたまとまりを持たず、各派が分裂し並立しているのが実情である。日本現象学会や実存思想協会にしても、ハイデガーに関心をよせる人びとの連絡組織としては、必ずしも全国規模たりえていない。同じ思索者に関心を寄せる者どうしが、互いに対話のないまま、次第に閉塞状況に陥り、退潮を余儀なくされているのは、健全な姿とは言いがたい。

この旧弊を打破し、開かれた対話交流の「時・空」を新設し、相互に連帯しつつ緊張感をもって議論を交わしていくことは、意義のあることだと考える。新たな世代を育成するに当たっても、分派ごとに囲い込むのではなく、共通の言論空間において切磋琢磨する機会を提供することが、重要であろう。自由な相互批判の場を共同で設立することは、現代日本における哲学研究全般の危機を打開する機縁ともなりえよう。

開放性という点では、ドイツ、オーストリア、フランス、イタリア、スイスはもとより、チェコ等も合わせての東西ヨーロッパ、韓国や中国、台湾を中心とする東アジア、また、今やハイデガー研究の中軸となった北アメリカ、さらに、チリ等の南アメリカと、世界各地における同時代の研究動向とリンクする必要がある。ハイデガー研究に関する地球規模の発信中枢たろうとすることは、今日まさに現実的なプログラムとして掲げられてよい。ハイデガーが今から半世紀前に提起した「技術への問い」が、ますますアクチュアルかつ「グローバ

ル」な問題提起となつてゐることを、ここで想起してもよい。

なお、些細な違いでの分立を乗り越えるべく、本フォーラムでは、「ハイデッガー」と、「ハイデガー」の、どちらの表記もひとまず可としたい。

さて、もう一つ、従来のハイデガー研究の問題点として挙げられるのは、ひたすら専門に閉じこもり、ハイデガー語を復讐して足れりとする閉鎖的風潮である。だが、自足自閉の時代は終わった。われわれは、ハイデガー研究の囲い込みを意図するものではなく、専門家集団を自任するつもりもない。ハイデガーの思考が現代哲学に与えた広大なインパクトを考えれば、むしろさまざまな方面へ越境しつつ連帯の輪を広げてゆくことを、使命とすべきであろう。彼の主著が二十世紀の古典の地位を確立して久しいが、二十一世紀の今日においてハイデガーの思索への関心は少しも衰えることなく、日々新たな思考を育みつつある。その裾野は広く、哲学（倫理学、美学を含む）の諸部門はもとより、神学、文学、教育学、社会学、精神医学、近年ではとくに政治学、と多様な分野に跨がっている。

いわゆる哲学思想にかぎっても、ハイデガーとの関わりが問題となる思想家を挙げればきりがない。その拡がりたるや、他のライバルの追隨を許さないほどであり、「二十世紀における最もお騒がせな哲学者」との令名を証してあまりある。

まずは、生の哲学、新カント派、解釈学、現象学、実存哲学、分析哲学、科学哲学、批判理論、ポストモダンといった、現代哲学の諸潮流。すなわち、キルケゴール、ロツツエ、ブレンターノ、デイルタイ、ヨルク、ベルクソン、ヴェーバー、リツケルト、ナトルプ、フツサール、シェーラー、ラスク、ルカーチ、ミツシュ、リップス、ヤスパース、ブルトマン、シュミット、カッシーラー、ヴェイトゲンシュタイン、カルナップ、オースティン、ライル、コイレ、シュタイン、レーヴィット、ガダマー、シュトラウス、フィンク、パトチュカ、サルトル、カミュ、メルロ・ポンティ、リクール、レヴィナス、アンリ、デリダ、ナンシー、マリオン、ラカン、フーコー、ドゥルーズ、ブルデュー、リオタール、ラクー・ラバルト、ヨーンナス、アーレント、アンダース、マルクーゼ、ホルクハイマー、アドルノ、ベンヤミン、ハーバーマス、リッター、ブルーメンベルク、シュミッツ、ヘルト、ヴァルデンフェルス、トウーゲントハット、スローターダイク、クーン、ローティ、テイラー、ドレイファス、フーコー、とといった面々。

さらに、ハイデガーが「対決」した西洋思想史上の相手。パルメニデス、ヘラクレイトス、プラトン、アリストテレス、パウロ、アウグステイヌス、トマス、スコトウス、エックハルト、スアレス、ホッブズ、デカルト、パスカル、ニュートン、ライプニッツ、カント、ゲーテ、フンボルト、フィヒテ、ヘルダーリン、ヘーゲル、シェリング、マルクス、ニーチエ、トラクル、リルケ、ユンガー、ツェラン、等々。

もちろん、ハイデガーとの対決を内に秘めて展開した日本近代哲学の流れも忘れてはならない。西田、田辺、和辻、丸鬼、三木、三宅、西谷など。

このように研究の裾野を広くすることも重要であるが、最も肝腎なことは——多くの弟子

たちが率先して行なったように——ハイデガーを手掛かりとしつつ、みずから哲学すること  
を学ぶことである。二度にわたる世界大戦という未曾有の危機を経験した同時代に真に応答  
しつつ、ハイデガーはおのれの思索の事柄を掴み、それにあくまでこだわり続けた。実存と  
存在についての、また技術と自然についての、独自の思索がそこに生まれ、さらにその応答  
として、多くの思索者が事象そのものへと向かっていった。ハイデガーに仮借なき対決をい  
どむことが、そのつど新たな展開を呼び起こしてきたのである。範とするにせよ批判するに  
せよ、ハイデガーという事例が現代における思索の糧となりうることは、否定すべくもない。  
彼の思索に代表される二十世紀の哲学を踏まえ、二十一世紀の哲学の可能性を拓く自由な言  
論空間を創設すること、これがわれわれの志である。

具体的な活動としては、①フォーラム参加者の「共通の関心事」となりうる統一テーマを、  
広く意見を募ったうえで大胆に選定し、それにもとづいて大会を年一回開く。テーマに沿つ  
た研究発表（依頼と公募の両方）を主とするが、それぞれ質疑応答の時間をじゅうぶんと  
（発表三十分、討論五十分を目安とする）。依頼による発表者と公募による発表者が、対等  
に競い合う形で同一のテーマを論じる。応募のなかからの発表者の選定に関しては、発表希  
望レジュメをフォーラムのホームページで公開し、それに関してメールリクエストに寄せら  
れた意見を勘案したうえで行なう。つまり、公開審査制を実験的に取り入れる。適任の司会  
者の選定にも力を入れる。その場の全参加者が応答し合い、徹底した討議を行なう。発表者  
には、ベテランと若手とを問わず、たんなる業績作りのための学会発表ではない、創意にと  
む問題提起を期待したい。②この年次大会と緊密に連動して、毎年の活動を集成し公開すべ  
く、会誌『ハイデガー・フォーラム』を編集・制作し、電子ジャーナル化して、フォーラム  
のホームページに掲載する。印刷・公刊にはさしあたり固執しない。とはいえ、専門研究論文  
の寄せ集めでない、統一テーマを掲げての気鋭の競作集となれば、読者層もある程度見込め  
るので、書籍としての出版もいずれは実現したい。

近時、学会での発表や学会誌への投稿は、既存の枠に収まる専門研究を若手研究者に再生  
産させる制度として機能している。それがまったく無意味とは思わないが、このシステムが  
学会活動を、思考の研鑽の場としては縮小再生産に陥らせ、陳腐化させてきた面があること  
は否めない。発表者や投稿者の多くが、生き生きと自分の言葉を紡ぎ出すどころか、業績の  
本数にカウントされるためだけのものをせっせと量産している。これが現状だとすれば、学  
会活動に励めば励むほど、それだけ学界停滞の弊を招くことになりかねない。そのあたりで  
若手研究者の将来がどんどん暗くなっていくとすれば、そういう再生産システムとはそもそ  
も何であろうか。本フォーラムは、以上の反省にもとづき、「学会」「研究会」「協会」をあ  
えて名乗らず、もっぱら討議の場であろうとする。目先のメリットにとらわれず自由で闊達  
な議論を交えるよろこびを呼び戻せればと願う。

今後の日程としては、二〇〇五年中に準備を進め、二〇〇六年九月に第一回のフォーラム

を開催したい。当面の課題としては、i. 会の規約をどうするか、ii. 運営費をどのように賄うか、iii. 大会実行委員の組織化、iv. 賛同者名簿やHPの管理、等がある。始まりにさ  
いして「約束」が重要であるの言うまでもないし、会としてたんにルーズなだけ打ち出した望  
ましくないが、既存の学会組織のあり方にとらわれない新機軸をできるだけ打ち出したい。  
なお、運営資金に関していうと、態勢を整えば科研費への応募が当然考えられるが、それと  
はまた別に、一般企業からの寄付を募るという可能性もある。

フォーラムのテーマ候補としては、「デリダ」、「ハーバーマス」、「アーレント」、「西田」、  
「レヴィナス」、「ナチズム」、「暴力」、「闘争」、「テクノロジー」、「環境哲学」、「グローバリ  
ゼーション」、「ソクラテス以前」、「プラトン」、「アリストテレス」、「中世哲学」、「科学革命」、  
「デカルト」、「カント」、「ドイツ観念論」、「ニーチェ」、「現象学」、「解釈学」、「プラグマテ  
イズム」、「哲学」、「学問」、「存在」、「時間」、「真理」、「世界」、「自然」、「歴史」、「言語」、  
「詩」、「メデア」、「行為」、「出来事」、「神」、「死」、「ヒューマニズム」、等が考えられる。  
候補となりうるテーマの豊かさからしても、現代においてハイデガーを「叩き台」としてみ  
ずから思考する可能性がいかに広大であるか、が知られよう。ハイデガーを超えてどこまで  
思考を続行できるかが、われわれに試されているのである。

われわれが目下その開催に向けて準備している第一回フォーラムには、記念すべき初回に  
ふさわしい強力なテーマを選びたいと思う。今のところ、統一テーマを（ハイデガーの同名  
テクストにちなんで）「哲学の終焉と思索の課題」とし、さらに「デリダ——ハイデガーと  
現代フランス哲学I」を特集として組む予定である。この特集の仕方は、今後も継続する方  
針である。さらに、第二回以降は、「ナチズム」もしくは「全体主義」という主題設定も検  
討したい。いずれも、「ハイデガー・フォーラム」ならではの論題といえよう。逆にいえば、  
ハイデガーの思索に学ぶことからどれだけ豊かな広がりをつけられるか、研究者の多くはこ  
れまで正面から問い直してこなかったのである。その「怠慢」からの脱却は、当然、ハイデ  
ガーの思索を——死蔵するのではなく——生かすことにつながるだろう。引きこもりの護教  
でも、レッテル貼りの批判でもない、真剣な相互対話が求められるゆえんである。

すでに、「ハイデガー研究会」が関東の大学所属の研究者を中心にして十年前から活動中  
である。同名の研究会は関西にも存在し、着実に実績を積み重ねている。連携が見込まれる  
この両者は、本フォーラムのいわば地区部会と見なせるだろう。今後他の地区で新たな研究  
会を発足させるのもよい。対等なものどうしの張り合いの気風、その意味での「共和」の精  
神がみなぎりつつあるという予感に襲われるのも、ゆえなきことはあるまい。まだまだ実務  
に関して問題は山積しているが、それを優に吹き飛ばすパワーを結集できるものと、われわ  
れは信じる。同好の士の連帯と友愛を、広く江湖に呼びかけたい。

（二〇〇四年七月起草森一郎原案を、逐次改訂のうえ、二〇〇五年八月森確定。）